

長寿科学総合研究事業採択課題一覧(介護関連課題抜粋:平成15年度実施分)

	主任研究者	所属施設	職名	研究課題名	研究概要
1	荒井 由美子	国立療養所中部病院長寿医療研究センター 看護介護心理研究室	室長	「在宅介護の質」:評価尺度の開発および 介護負担との関連について	要介護者高齢者の状態、介護者の状況、居宅内の介護環境について、簡便性を持ちつつ、客観的に評価できる 指標を開発。それにより要介護者を取りまく「在宅介護の質」を総合的に評価し、「在宅介護の質」と介護者の介護 負担との関連性を明らかにする。
2	安村 誠司	福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座	教授	介護予防事業の有効性の評価とガイドライン の作成	平成12年から各市区町村で実施されている「介護予防・生活支援事業」のうち転倒・骨折予防、閉じこもり予防事 業について、事業内容を調査し、「介護予防」の効果指標および事業の有効性を検証。評価をもとに、効果ある事 業を全国的に実施できるように、実施ガイドラインを作成。
3	鈴木 隆雄	(財)東京都老人総合研究所	副所長	寝たきり予防を目的とした老年症候群発生 予防の検診(「お達者検診」)の実施と評価 に関する研究	寝たきり、要介護状態に結びつきやすい、「転倒(骨折)」、「失禁」、「低栄養」、「生活機能の低下」のハイリスク群を 早期に発見する、スクリーニング項目を開発。さらに状態の悪化を防ぐ、費用対効果が高く、実用性、普及性のある 介入プログラムを開発する。
4	鳩野 洋子	国立保健医療科学院公衆衛生看護部	室長	要介護状態予防が必要な対象把握に対す る研究	介護予防活動の推進のため、介護予防が必要な対象者を把握する客観的調査項目を開発。大規模自治体につ いて、対象者把握の中心組織、把握の方法を調査し、効率的な対象者把握の手法を開発。
5	赤川 安正	広島大学大学院歯歯薬科学総合研究所	教授	舌機能評価を応用した摂食嚥下リハビリ テーションの確立	摂食、嚥下で重要な役割を果たす舌運動を、簡便で客観的に評価できる指標、測定法を検証。舌運動と食事形 態、栄養状態との関連性を明らかにし、さらに舌運動の効果的なリハビリテーションプログラムを開発。
6	遠藤 英俊	国立療養所中部病院内科	内科医長	要介護状態に応じた介護サービスに関す る実証研究—立案された介護サービス計 画の質の評価に関する研究	要介護者の認定基本調査項目や状態像と、給付された在宅介護サービスとの関係の中で、生活機能の維持・向 上に関係の深いサービスの種類、利用頻度、提供方法を抽出する。さらに状態像に応じた適切なケアプランを提 示し、その有効性を評価する。
7	大川 弥生	国立療養所中部病院長寿医療研究センター 老人ケア研究部	部長	在宅高齢者に対する訪問リハビリテーシ ョンのプログラムとシステムに関する研究	現在施設、在宅で実施されているリハビリテーションのプログラム内容から生活機能維持・向上に効果的であった プログラムを抽出し、効果的、標準的な訪問リハビリテーションプログラムを明示。さらに効果的で、利用率向上の ための医療-介護リハビリシステムの具体的戦略、行政の役割を明らかにする。
8	高田 和子	独立行政法人国立健康・栄養研究所健康増進研究部	主任研究員	高齢者の自立度及びQOLの維持及び改善 方法の開発に関する大規模研究	生活満足度、身体活動・日常生活機能、ライフスタイル、経済状況、社会活動、疾病・障害、健康管理から高齢者 のQOL生活習慣を明らかにし、さらに経時的に調査することで、QOLに影響を与える要因を明確化する。さらに明 確化した要因をもとにQOL維持に効果的な介入の方向性を検証する。
9	内藤 桂津雄	日本大学文理学部	助教授	痴呆予防と初期痴呆高齢者に対する日常 生活支援の方法に関する研究	認知記憶機能および日常生活機能に関する簡易で客観的な自己評価指標を開発。さらに地域での日常的な生活 活動を通じた痴呆予防活動を企画、実施し運用上の課題および効果の測定を実施する。
10	佐藤 祐造	名古屋大学総合保健体育科学センター	教授	高齢者の健康増進のための運動指導マ ニュアル作成に関する研究	高齢者のIADL、ADL、疾患・障害ごとに運動プログラムを提示、客観的、非侵襲的な指標を用いて有効性を検証。 得られたエビデンスを基に個々の高齢者に応じた有効性、安全性の高い運動指導マニュアルを作成する。
11	辻 一郎	東北大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野	教授	介護予防に特化した在宅訪問指導プロ グラムの有効性評価に関する介入研究	運動機能・認知機能・うつ・呼吸循環機能・歯科口腔状態・聴覚・泌尿器科的状态・生活習慣・社会的状況などか ら、個々の高齢者の状態を総合的、多面的に評価。運動機能低下、抑うつ状態の対象者を抽出し、介入プログ ラムの有効性に関してRCTを実施。
12	多々良 紀夫	淑徳大学社会学部	教授	高齢者虐待の発生予防及び援助方法に 関する国際的研究	平成10年から13年に多々良班で実施した高齢者虐待の研究成果を翻訳し、8ヶ国に配布。さらに諸外国の研究協 力者と共同で、複数の国における高齢期の心配事、世代間の比較研究を実施。

効果的医療技術の確立推進臨床研究事業(MF痴呆・骨折分野)採択課題一覧(介護関連課題:平成15年度)

No	主任研究者	所属施設	職名	研究課題名	研究概要
1	児玉 桂子	日本社会事業大学社会福祉学部	教授	痴呆性高齢者にふさわしい生活環境に関 する研究	介護者や専門職への調査により、痴呆性高齢者の状態像に対応した居宅環境整備方法を在宅・施設で検証、痴 呆ケア実践のための環境支援指針を作成。指針に基づき居宅環境に介入試験を実施。
2	朝田 隆	筑波大学臨床医学系教授	教授	痴呆性疾患の危険因子と予防介入	痴呆性疾患の危険因子となる遺伝子型を特定。痴呆症前駆状態の診断に高精度で有用性のあるスクリーニング 手法を開発。この集団スクリーニング法を用いて、痴呆前駆状態、痴呆、うつのある有病率を算出。前駆状態の画像 的特徴の把握。さらに前駆状態者に睡眠、運動、栄養、知的刺激の面から有効な介入プログラムを検証。
3	高岡 邦夫	信州大学医学部整形外科	教授	高齢者の転倒と骨粗鬆症に伴う骨折の予 防を目的とした疫学的環境医学的治療学 的研究	骨密度、脆弱性骨折発生頻度、大腿骨頸部骨折発生頻度、転倒発生頻度、と生活環境要因を経時的に疫学調査 し、関連性を検証。原発性骨粗鬆症患者に対し、薬物による介入試験、高齢女性に対しプロテクター使用による骨 折頻度の介入試験を実施。
4	中土 幸男	国立長野病院整形外科	医長	大腿骨頸部骨折発生におけるマイクロク ラック集積の影響と超音波およびプロテ クターの骨折予防効果に関する基礎的研究	大腿骨頸部骨折の発生メカニズムを組織学的、応用力学的に解明。大腿骨頸部骨折のリスク指標として超音波 測定法による骨質の有用性を骨密度測定と比較。大腿骨頸部骨折のADL、QOLに与える影響の疫学調査。粗 鬆骨への超音波照射の治療的意義のin vitro下の考察。ヒッププロテクターの衝撃吸収性能の評価
5	石橋 英明	東京都老人医療センター整形外科	医長	多施設による大腿骨頸部骨折の長期機能 予後および生命予後に対する在宅リハビ リテーションによる介入効果の検討	大腿骨頸部骨折患者を対象として在宅リハビリテーション介入を行うことにより、この骨折の長期機能予後および 生命予後に対する効果を、要介護度、BADL、IADLを指標に検証する。
6	千野 直一	慶応義塾大学医学部リハビリテーション学教室	教授	脳卒中による機能障害及び能力障害の治 療及び訓練に関する研究—維持期におけ るリハビリテーション医療とその効果	脳卒中後の機能障害、能力低下、社会的不利、サービス利用状況を標準化された尺度で調査、全国レベルの データベースを作成。データをもとに排尿障害、骨粗鬆症、歩行について要介護状態が改善しうる対象群のスク リーニング手法を検討し、適切な維持期リハビリテーションの介入方法を開発、実証。
7	大川 弥生	国立療養所中部病院 長寿医療研究センター 老人ケア研究部	部長	病棟・居室棟でのリハビリテーションと施設 設備に関する研究—脳卒中と骨折の共 通点と相違点を含めて—	脳卒中後および骨折後の機能障害を客観的、標準的に評価する指標を開発。指標を基に個人毎、施設設備毎に 適切なリハビリテーション計画を検討し、その有効性、実効性を証明。その結果をもとに病棟、居室リハビリのあり 方と、各サービスの連携につき啓発活動を実施。
8	鳥羽 研二	杏林大学医学部高齢者学教室	教授	寝たきりプロセスの解明と主たる因子に対 する介入効果に関する研究	高齢者のADL、生活習慣、疾患を経時的に調査し、ADLの増悪、改善に関連性の高い因子を抽出。さらに施設入 所者のADLの低下と転倒骨折、認知機能低下、うつとの関連性に注目、その予防改善に適切な介入手法を検証。
9	高田 和子	国立健康・栄養研究所健康増進部	主任研究員	虚弱高齢者を対象とした運動及び栄養指 導に関する介入研究	高齢者のADL、生活習慣、健康状態等を経時的に調査し、ADLの低下に関連性の高い生活習慣、疾患を抽出。さ らに運動、栄養指導の適切な評価指標を検討し、介入後の長期的な効果を検証した。